学校だより

翔　　空

№４０　平成２４年　２月１４日（火）
郡山市立喜久田中学校長　大堀　昌弘

「翔空（しょうくう）」の由来　〈校舎のシンボル〉

壁画「空へ」を受け、風光明媚（ふうこうめいび）なこの学舎（まなびや）から、**希望に燃え限りない空へ、力強く翔んでほしいという願い**を込めて、翔空の碑ができた。

［著名な古典の一節］

引き続き著名な古典の一節を紹介します。

今回は、鴨長明の「方丈記」と並ぶ隠者文学とされる吉田兼好の「徒然草」の有名な冒頭の部分です。

［原　文］
つれづれなるままに、日くらし、硯（すずり）にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

［現代語訳］
何もすることもない退屈なままに、日がな一日、（筆を手にして）硯に向かい合って、あれこれと心に浮かんでくることを漫然と書き留めていくと、物狂おしいような不思議な気持ちになってくるものである。

※　どうですか。この序段の書き出しは、有名な「つれづれ」で始まりますが、その「つれづれ」とは、何もすることなく、ひまで退屈な状態をいい、「徒然草」とは、「ヒマ人の本」とか、「退屈しのぎの本」とかの意味だそうです。しかし、本当はそれは謙遜であってなかみは、人生のさまざまな出来事を斬新な視点により観察したものを綴ったものとなっており、するどい社会批判などが達意の文章により展開されています。もう一度、中高生になったつもりで原典を読んでみませんか？

三寒四温（さんかんしおん）とよく言いますが

～冬が寒ければ寒いほど、春は暖かい～

皆さんは、春夏秋冬の四季のうちどの季節が好きですか。私は、春から夏にかけてが好きです。もっと厳密に言うと、５月初夏のころです。猪苗代では、５月初旬、ゴールデンウィークの頃に最後の桜が咲きます。そして辺り一面に鮮やかな緑がまばゆいばかりに映えます。

ところで、「冬が寒ければ寒いほど、春は暖かい」とよく言われます。陰鬱（いんうつ）で、暗く、寒く、食料の乏しい冬になると、ほとんどの生物たちは、生命活動を最小限にとどめて、ひっそりと暮らします。中には、冬眠に入り、一切動かない動物さえいます。冬は、人間の世界では、逆境によくたとえられます。植物がたねを土中に埋めて翌年の活動の季節を静かに待ち、じっと我慢しているように、私たち人間も、くよくよ悩んだり、絶望したりせず我慢しなければなりません。

どんなに雪深い北国にも、必ず暖かい春が訪れるように、逆境にあえいで、うめき声を出している人にも、いつかはきっと輝かしい希望の光が見えてきます。今、どん底にあり、何をやってもうまく行かないからと言って、あきらめたり、やけを起こして自分をダメにしてしまっては、本当に立ち上がれなくなってしまいます。八方ふさがりのようで、**時間だけはたっぷりとある冬こそ、じっくりと過去・現在・未来を見つめ、学問にいそしみ、やがて来る春に向かって備えるとき**ではないかと思います。（これは、自分に言い聞かせていることなのですが。）

今回は、なぜか、暗い話題となってしまいましたが、**もう春まであともう少し**。ありがたいことに、今週は比較的暖かい日が続きました。来る３月１３日に卒業生７９名は、１３０名の在校生に見送られながら、新しい世界へと飛び立ちます。同時に、**伝統の引き継ぎ**がなされ、在校生は、１つ上の学年に進級し、今まで先輩方がやってきた仕事や役目を今度は自分が果たさなければなりません。あと、１ヶ月でその引き継ぎが十分になされることを心から祈るばかりです。この時期は、大人にとっても子どもにとっても**不安と期待の入り交じる複雑な季節**なのです。